



ル一
テル

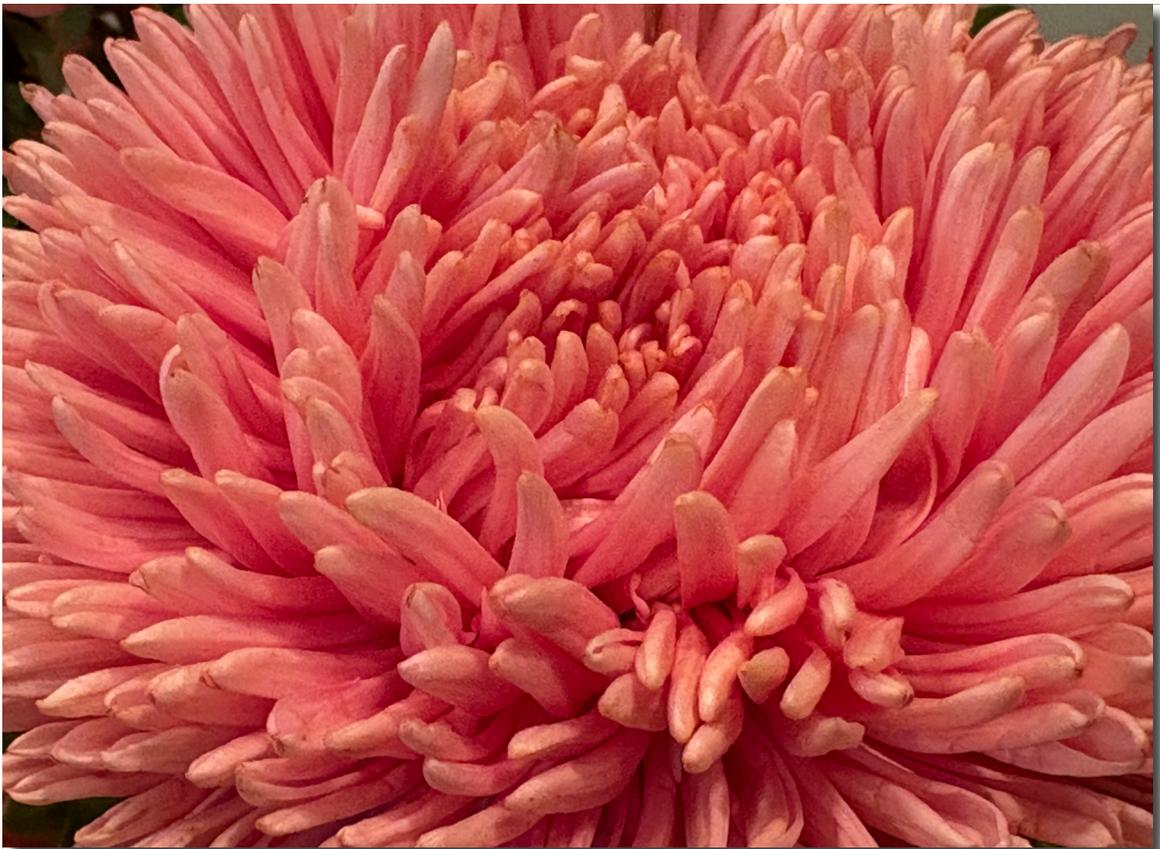
藤が丘だより

発行 月報委員会

発行日 2026年 2月 1日

No. 141

十字架の言葉は、
減んでいく者にとっては愚かなものですが、
わたしたちを救われる者には神の力です。
コリントの信徒への手紙一 1章18節 ・ 新共同訳



わたしの隣人に対して、一人のキリストになろう

喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。

ローマの信徒への手紙 12章 15節



「後向きに生きる」

佐藤和宏牧師

マタイによる福音書 4章 12-23節

主イエスはその宣教の始まりに、「悔い改めよ」と呼びかけられています。「悔い改め」と訳されている言葉は、方向転換を意味すると言われます。つまり「前向き」に生きている私たちに、そちらは進むべき方向ではないと告げているということです。

主イエスが「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言われる場合、次のようなことを意味しているのではないのでしょうか。「方向転換をなさい。あなたがたが向かっている『前』は正しい方向ではないからである。天の国は近づいた。それはあなたがたが向かっている反対の方向にあるのだ。」

悔い改めとは、神を主語とした命にあって、これまで向かっていた「前」が必ずしも正しいのではないと気づかされて「方向転換」し、後ろ向きに歩み始めるということなのです。

手漕ぎボートは、ご存じの通り漕ぎ手が後向きに座り、ボートを漕ぐことで前に進みます。前向きに生きることを良し、それを肯定し積極的に評価するこの世の常識からするならば、それは否定的であり消極的な態度に重ねられるでしょう。しかし実際に試したことがあるのですが、前向きに座って漕ごうとしても、うまく前には進まないのです。

オリンピックの競技でもあるボートの中の「エイト」と言われる競技は、8人の漕ぎ手に、「コックス」と呼ばれる舵手を加えた9人がメンバーです。漕ぎ手は、進行方向に対して後向きに座るのですが、「コックス」と呼ばれる舵手だけは、一番後ろに前を向いて座っています。漕ぎ手と顔をあわせるように座っていますから、漕ぎ手の様子がみえ、また進行方向の情報を把握し漕ぎ手に指示しま

す。漕ぎ手は、舵手の指示に従い、後向きに進むのです。このボートという競技に、私はキリスト教信仰のあり方を思うのです。それは一般的な「前進」する方法と違いますから、「前進」していないように見えるでしょう。自分たちが「前」であると思っているもの、人の積み上げて来た経験を通して肯定的積極的に評価されているものに向かっているのではありません。不安と恐れを思うでしょう。それら肯定されてきたあらゆるものから、反対に向かい、また遠ざかるように見えますから、無駄だ無意味だと考えるでしょう。しかし重要なことは、この世の論理からするならば否定的にみえる「後向き」な生き方をする、私たち教会の群れに対して、一人の「コックス」舵手として乗り込み、この世からするならば後向きの方角をしっかりと見つめている方がおられるということなのです。その指示に従う限り、たとえ後向きにみえる命も間違いはないのです。その指示こそ、私たちが聞くべき御言葉なのです。

本日礼拝に引き続いて、教会総会が開催されようとしています。この世の状況を前向きに見るならば、困難に思われる時代にちがいはありません。しかし信仰にあって後向きに見つめ直すならば、困難の中にも満ち満ちた恵みを見いだすことができるのです。困難の中にこそ、神の御心を聞き取って、恐れずに歩み始めることができるのです。なぜなら、私たちの舟にも、主が共に乗り、本当の前とすべきものに向かって、後向きに進ませるからです。日々の生活の中から集められる、毎週の礼拝の中で御言葉に聞き、喜んで後向きに生きる群れとされてまいりましょう。

(顕現後第3主日)

『何事にも時があり 天の下の出来事にはすべて定められた時がある。神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業を始めから終わりまで見極めることは許されていない。』（コヘレト3:1,11）

このような証しの機会を与えてくださった神さまに感謝します。神さまが私に与えてくださった恵みについてお分かちさせてください。

私が初めてイエス様に会ったのは、大学4年生の時でした。大学構内で声をかけられあるミュージカルを観ました。それは、イエスの生涯についての話でした。その場にいたクリスチャンに、聖書の学びと教会に誘われ、自然な流れで通うことになりました。高校生の時、三浦綾子さんの「氷点」を読んで感銘を受け、いつか聖書をちゃんと読んでみたいと思っていたからです。

大学進学のために上京してきていた私は、自由な大学生活を楽しみながらも、どこかで寂しさや生きることの虚しさを抱えていました。そんな私の渴いた心に、御言葉は、水のように染み渡り、心を満たしてくれました。そして、私を愛し、私の罪のためにイエス様が十字架で死なれたことを、恵みのうちに信じ受け入れました。

救われた私は、湧き上がる喜びと神さまの愛につき動かされて、たくさんの人に福音を伝え、教会に導き、その中から救われる魂も起こされました。毎日の早天祈祷会、週一の徹夜祈祷会、年末の断食祈祷会などの祈り会、日ごと行われる聖書勉強や集会、様々な奉仕活動、キャンパスや路傍伝道などに明け暮れた20代でした。それこそ、朝早くから夜遅くまで馬車馬のように働きました。若さも

体力も情熱もあり、主のため魂の救いのため、用いられることに喜びがあったのです。若者が多く集まっており、祈りと御言葉に熱心で、伝道と宣教に燃える勢いのある教会でした。その中で、長年リーダーを務め、献身の道も示されました。用いられることは感謝でしたが、一方で、過度な要求や理不尽な叱責などが続く中、教会の体制や教職者に対する違和感が大きくなっていきました。そして、聖霊に押し出されるように、11年間いた教会を離れました。

それから6年後、当時の牧師の不祥事が常習的に行われていたことが明らかになり、教会の組織的な隠蔽体質が問題であると、キリスト教関連のメディアが報じたことを風の便りで知りました。教会にいた当時、聖霊によって示されたあの違和感の正体を、その時初めて知ったのでした。そして、牧師が辞任し、教会が分裂したこと、多くの兄弟姉妹が心に深く傷を負ったことなどを後に聞きました。

その間、私は主を求める心から、いろいろな教会を訪れてはみたものの、続けて通うことはありませんでした。教会に対する不信感や属することへの恐れがあったからです。居場所を失った私は、世の中の生活にどっぷり浸かって、次第に神さまから、心が離れて行きました。何年も教会や信仰生活から遠のいていたので「私は神さまから離れた」と、そう思っていました。でも、実は「神さまは私をとらえて離さなかった」のです。

不思議な導きで、11年前、ルーテル藤が丘教会のクリスマスイブ・キャンドルサービスに来ることになりました。仕事で訪れた先が、藤が丘教会の信徒さんのお宅で、壁にかかっていた千羽鶴から教会の話になり、近々イブ礼拝があることを聞きました。「昔教会

に通っていたが、今は行っていない」と私が言うと、その信徒さんは「せっかくの機会だから、またどこか教会に行かれてみては？」と勧めてくれました。私は、なぜか藤が丘教会に行ってみたく強く思ったのです。それで、勇気を出して行ってみることにしました。久しぶりの教会では、賛美が心に響き、温かいものに包まれているような感覚がありました。

その後、本当に驚くような展開で、自分の思いと意思を超えた神さまの働きにより、牧師先生と結婚する運びとなったのでした。私は結婚するにあたり、教会の牧師館に住むことに対して戸惑いがありながらも「礼拝に行くのが近くていいかも」と思いました。また、私が長い間、教会から離れていたから「神さまが私を捕まえてこの場に置かれたのかもしれない」とも考えました。そして、20代の時に味わった魂の躍動感、充足感、用いられる喜びをまた体験できるのかな、と期待する心もありました。

しかし、実際は、とても苦しく、孤独な教会生活となりました。心が閉ざされてしまい、祈れなくなり、御言葉が読めなくなり、礼拝に行く足がとても重く感じられるようになったのです。そして、ついには礼拝や集会に行くことが出来なくなりました。どうしてこのような状態に陥ったのか、どうすればこの状態から抜け出せるのか、皆目検討もつきませんでした。

昔、教会に行っていない間も、主が共におられるということをふと感じることはありました。でも、皮肉なことに、教会の中に住んでいながら、主と出会ってから今までで一番、神さまがはるか遠く彼方に感じられたのでした。私はもしかして、選ぶ道を誤ったのかもしれないとさえ思いました。

教会の上に住んでいるのに礼拝に行けないという長い期間、神さまは私の内側を徹底的に見るようにされました。

『主よ、あなたはわたしを究め わたしを知っておられる。』（詩編139:1）

それは、私の中に深く根ざす罪でした。以前の教会で、私は全てを主のために捧げてきた、という自負心や驕りがあったのでした。聖書の中のファリサイ派の人々や律法学者のように自分の正しさを誇り、他の人や教会を裁く心があったのでした。救われたことや用いられることは、ただ神さまの一方的な恵みにすぎないのに、感謝を忘れた傲慢な自分自身の姿があったのでした。

そんな私を、神さまは「何も出来ない」という状態に置かれました。「何も出来ないのに、教会の上に住まなければならない」という状況に導かれました。その中で「祈ること、聖書を読むこと、信じること、礼拝を捧げること、賛美すること、教会に行くこと、奉仕すること、兄弟姉妹と交わること」—それらのすべてが、聖霊さまの助けなしには、何一つ出来ないことが心の底から分かりました。

『あなたは初めのころの愛から離れてしまった。だから、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて初めのころの行いに立ち戻れ。』（黙示録2:4-5）

主と出会ってからのことを思い返してみると、救われた喜びに溢れ、用いられた日々感謝がある一方で、道を逸れた教会の中で若い時代を過ごしたことや、その中で魂が深く傷付けられ燃え尽きてしまった経験、心が頑なになり主を拒み苦悩した日々も、私にとって決して喜ばしいことばかりではありませんでした。しかし、万事を益としてくださる神さまの約束を思う時、今は分からなくとも、きっと意味があり神さまのご計画のうちに進んでいるのだと信じられるようになってきました。

長いトンネルを彷徨っていた私でしたが、冒頭に挙げたコヘレトの御言葉のように、神

さまの時に、聖霊が新たな信仰の道へと導いてくださっています。おそらく、人知れずたくさんの方が祈ってくださり、何よりイエス様のとりなしの祈りのおかげで、頑なな心が開かれ、再び御言葉を聞く耳が与えられ、賛美し祈る口が備えられ、目の覆いを取り除かれて、イエス様を我が主として信じる恵みが与えられています。

一つ一つのことに、今も生きておられる主が、共にいて、導いてくださっていることに感謝します。これからの歩みの中で、私の頭では到底理解できないことや納得できないこと、疑念を抱くこともあるかもしれません。それでも、神さまは愛なる方であり、絶対的に善なる方であり、私たちを誰よりもご存知で、私たちを何よりも愛してくださっている。そのことを、見失うことなく、主を信頼して歩んでまいりたいと思います。そして、私も祈りを必要としている多くの方々のために、祈りを捧げる者へと変えられていきたいです。

小さきものにも目を留め、慈しみ、用いてくださる方に、全ての栄光を帰します。
アーメン



信徒の皆さんから寄せられた、 『佐藤牧師の思い出』

●4つの思い出 田〇〇夫

佐藤先生、藤が丘教会での12年間のご奉仕を心から感謝申し上げます。先生と共に歩んできた月日を振り返ると、私の中には4つの大きな思い出があります。

1、出会いの日

12年半前、前任の小副川先生の後にごなたが赴任されるのか、期待感と緊張感が入り混じった気持ちで役員会からの報告を待ってい

たことを昨日のこのように覚えています。それが先生との最初の出会いでした。

2、「田〇さんは僕によく似ています」というお言葉

ある日、牧師室で何気ない会話だったと記憶していますが、先生が「田〇さんは僕によく似ています」とおっしゃってくださいました。その時の先生の表情と言葉の抑揚は、今も鮮明に覚えています。それ以来、ふと自分を振り返ると「先生と似ているな」とクスツとひとり笑いを度々していたことを思い出します。

3、Web宣教（主日礼拝のLive配信）

先生は赴任後まもなく、「WEBを活用した宣教」という新たな方向性を打ち出されました。前任の先生はDVDを利用し、その制作のお手伝いをしてまいりましたが、主日礼拝のLIVE配信という未知の領域は、私にとって大きな挑戦であり課題でもありました。思うようにいかず焦燥感に駆られることもありましたが、先生や信徒の皆さんとの対話、そして視聴くださる方々のご意見をお聞きしながら、試行錯誤を繰り返しながら配信してきたことは、今思えば良き思い出です。

4、宣教フォーラムでの4年間

信徒活動の宣教フォーラムにおいて、4年間に渡り活動を共にする機会を与えられました。一言では言い表せないほど多くの事を学び、貴重な体験をさせていただきました。

おわりに

礼拝後の突然のお知らせには驚きました。少々困惑した思いを今も抱えていますが、先生との数々の経験と学びは、これからの藤が丘教会の歩みの中で生かして行きたいと思っています。九州の地でのさらなるご活躍と、そして先生ご家族の皆さまの上に、主の豊かな祝福と御守りがありますようお祈りしています。

12年間、お疲れ様でした。そして、本当にお世話になりました。シャローム

●尾○松○

妻の回復を願って、総合病院のある藤が丘の地に移ってきました。町内のルーテル藤ヶ丘教会で秋のバザーがあったので買い物をしたのですが、この1件が教会出席のきっかけとなりました。それは2013年の11月のことです。それ以来、私は日曜礼拝と月2回の聖研出席を始めました。大きな喜びの時でありました。確か、佐藤先生が赴任された同じ年であったのですから、奇遇と言うべきです。

先生は大変心の広い方で、駅の反対側にあるカソリック教会との信徒交流を実行されました。また、湘南地区にある無牧教会の礼拝のためにも奔走されました。そんなご多忙中、週報を作ってください、私たちは紙面を通じて仲間の消息をつぶさに知ることができました。その他、水曜日の聖研ではギリシャ語のプリントも用意され、出席者は本格的な聖書の研究に与ることができました。

佐藤先生が赴任されて12年間、日曜礼拝と水曜日月2回の聖研出席は、私にとって信仰の生命線であったように思います。教会の信徒数の増加は神のご配慮と思いますが、先生の赴任以来、教会出席者が倍増したように見えます。私もほぼ70年間の求道者としての立ち位置をかなぐり捨て、先生から洗礼を授かりました。我が家は父神道、母が仏教であったので、息子の心変わりを大変心配したようです。私は両親から十分な理解を得られなかったのですが、異教社会にあって、受洗を通して自分の所属と立場を旗幟鮮明にすることができました。

長い求道者としての生活から、佐藤和宏先生を通してキリスト教に“変身”させていただいたことに、心から感謝申し上げます。

●○谷○子

初めて佐藤先生にお会いしたのは、礼拝前、ドアを開けて入ったところに先生がお立ちになっていて、ナイトのように私を迎えて

くださいました。ご挨拶の後、私は、先生お風邪ですかとお尋ねしたら、笑顔で地声ですとおっしゃって、私は平身低頭。それも今は良い思い出になりました。

長年聖研に出ていなかったのですが、永○さんにお声をいただいて、恐る恐る出席いたしました。コロナ禍のせいもあったのでしょうか。私の他にも大勢いらして慌てて椅子を出したり…と、盛況の時となりました。

毎回の聖研では、その日の聖書の箇所を読み回した後、先生が丁寧にわかりやすい言葉で読み解いてくださいます。その後各人の感想や質問が続きます。私の初歩的な質問にも、大学の先生のような博学の質問にも、同じように丁寧に答えてくださり、すっかり聖研が楽しくなってきたのです。またすべて主語は神様であることは理解していたつもりでしたが、先生は繰り返し繰り返しお話しされ、今では私の頭ではなく全身に入り込みました。忍耐しているのは私ではなく神様なのだつくづく思い知るこの頃です。

佐藤先生、本当に豊かな時間を与えていただき、心から感謝申し上げます。

追伸；先生の地声の素晴らしいことは、礼拝中での式文・讃美歌で皆様をご存知の通りです(笑)

●○井○子

先生が藤が丘教会に来られた時、総会資料に載っている写真に名前を書いてお渡ししました。先生は、最初の聖餐式の時お一人お一人の名前を覚えておられて配餐してくださいました。「○井さん、これはあなたのために与える・・・」着任されて間もない先生が、全員の名前を覚えておられる、驚きでした。お尋ねすると「フルネームで覚えると忘れません」とおっしゃいました。なんでもないように答えられましたが、私にとっては喜びでした。自分の名前を呼びかけてくださり、聖餐にあずかれるという恵みと感謝に溢れる聖餐

式でした。ずっと続いて当たり前のように思えるこの呼びかけ、私にとっては、毎回神様の恵みを何倍にも感じられる喜びにあふれた聖餐式です。本当にありがとうございました。

●清〇〇子

先生が藤が丘教会に赴任されて10余年、半ばまで私は離れキリシタンでした。諸事情で我が家のデナリは底をつきそうで、土日曜日関係なくパート三昧でした。その間も誕生日には先生直筆のひと言入りカードが届き、慰められました。カードを読むたびに、もう少しぶどうの木につながっていようと思いました。今まだ繋がっていられることに感謝します。先生の藤が丘教会牧会の後半にしか礼拝に出席できなかった私ですが、価値ある賜物をいただいたと感謝しています。健軍教会での豊かな日々をお祈りします。

蛇足ですが、お互い時にはジャンクフードを食べてもう少し太りましょう(笑)

●〇木〇子

佐藤先生の牧師としてのあり方に深い感銘を受け、心から感謝をいたします。

長い間社会の「組織」の片隅にいた身として、組織という視点から述べたいと思います。

まず組織を外側から見た時、佐藤先生が教会の組織としてのアップデートにご尽力くださった功績はとても大きいと考えます。特にネット環境、ホームページの立ち上げと管理、礼拝のネット配信などは、藤が丘教会は他のどの教会にも先駆けて行なわれ、ネットを見て藤が丘教会に興味を持ってくださった方々も少なくないはずで、と、ここまで先生への感謝。

翻って、組織を内側から見た時、佐藤先生

にとってこの藤ヶ丘教会での12年間は、果たして居心地の良いものであったのか、教会員たちは組織の長としての重責を背負った佐藤先生に真に寄り添い、お助けする覚悟ができていたかを自問することがあります。

役員として先生のお近くにいると、教会内での様々な軋轢や不協和音が、対牧師という形で漏れ聞こえることがありました。無論、先生は何もおっしゃいませんが、人間的な苦悩の一端はこの私にさえ垣間見えました。個人の信仰のみを正義と信じて、佐藤先生に負荷をかけていなかったのか、私たちがそれぞれ自身に問い定める必要があるかもしれません。余談になりますが、カソリックのシスター渡辺和子氏さえもそのご著書の中で、教会という組織の中でお心を患った経験を述べています。今後の私たちの課題として、信仰というワードに甘えず、成熟した一個人のクリスチャンとして聖職者と向き合い、良い関係を築いてゆく覚悟と姿勢が大切なのではないかと考えた次第です。佐藤先生が、私たち一人ひとりが成長するための課題を残してくださったと勝手に感じております。

●佐藤先生へ感謝。 永〇〇子

聖研で月2回12年間、佐藤先生から聖書を学ばせていただきました。それまでの私は既成概念にとらわれ、過去の出来事に苦しみとらわれ、未来にも不安を覚えて、全て神様に委ね、信頼して生きると言うには程遠い状態でした。聖研で先生の話の伺ううちに気がつく、あらゆることから自由にされている自分自身に気づかされました。私の心を変えていった先生の言葉を具体的に一つ一つ書くことは長くなるので省略しますが、

今、私は神へ全き信頼を置き、“私の愛する子よ”と優しく呼びかけてくださる神のもとで、日々を豊かに送らせてもらっています。導いてくださった佐藤先生に深く心より感謝しています。

●トーンチャイムの発表会を終えて 定〇〇子

この数年、クリスマスの時期に合わせて、教会の皆様の前でトーンチャイムの発表会が出来ていることに感謝しています。

第一礼拝の後、月に2回ほど、トーンチャイムの練習時間を設けていますが、前日に机や譜面台などの準備を下されるスタッフの方々、練習時にアドバイスを下されるスタッフの方々などに支えられて何とか続けることが出来ています。

また、当日が雨と言う悪天候にも関わらず、発表会のために駆けつけて下さった多くの教会員の方々に感謝申し上げます。

皆様が子どもたちに与えて下さった応援や励ましは、子どもたちの心に温かく響いたことでしょう。

今月、受洗記念日を迎えた方

8日 名〇〇安兄

おめでとうございます。



わたしの隣人に対して、一人のキリストになろう
「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」
ローマの信徒への手紙12章15節

●藤が丘教会の情報は、右のQRコードから



●女性会だより

1月18日 参加者10名
司会、祈り 永〇姉
讃美歌394番

- 1 聖書の学び
マタイによる福音書
11章25～30節
- 2 例会
①女性会会費について
②在り方検討委員会報告

次回は2月15日



☞スマートフォンで、こちらのQRコードを読み込むと、教会のさまざまな情報を、確認出来ます。